

史観第一五五冊

一三四

でも重視されるようになった。特に安史の乱以降、荒廃した華北に代わって江南地方は経済の中心として発展し、国内におけるその重要度はさらに高まったであろう。ここに至って初めて南北の感情的対立も解消されたのであり、その意味においては、南北が名実ともに統一されたのもこの時であったと言える。こうした社会的な変化に伴い、一地方の風俗に過ぎなかった茶は唐全域に共有されるようになり、より普遍的な文化として発展していったのである。

〈西洋史学専修〉

アルビジョワ十字軍と
フランス王権の伸張

鈴木 薫

一、はじめに

アルビジョワ十字軍は、一三世紀における教会主導による異端討伐の為の十字軍であると共にラングドック地方の王領併合に

帰結するというフランス統合の大きな里程碑でもある。本論の主な対象であるラングドック地方は当該十字軍開始まで北フランスとは深い関係になかった。また、言語、文化、習慣等の面においてきたフランスと南フランスとの間には相違があったのである。このような異文化の地域を統合するという歴史的イベントは、第三者的立場にあり、かつ、沖縄という異文化の地域を統合して近代国家形成を試みた歴史を持つ、日本人によって研究される点に意義があるといえる。同時に、ラングドック地方の王領併合のプロセス、すなわち武力ばかりに拠らない政治的妥結という過程に注目する必要がある。

ラングドック地方の中心都市はトゥールーズであったが、同市はトゥールーズ伯の拠点であったばかりでなく、市民自治の栄えた都市でもあった。この点においてフランス王権の伸張は国王と伯の関係のみでなく、国王と市民との関係においても捉える必要がある。したがって、本論ではアルビジョ

ワ十字軍からラングドックが王領に組み込まれ、国王と市民の関係の中から市民の慣習が特権として明文化されるまでを見ることで、国王と伯、市民との多重の関係を考察することとなる。よって、具体的には一二〇八年の十字軍開始から一二八六年のトゥールーズ慣習法明文化までとなる。従来、アルビジョワ十字軍とフランス王権の伸張についての研究は一二二九年のパリ条約、あるいは一二七一年の王領併合で区切られていたが、国王と市民との関係の決定、国王と市民の折衝と妥結を考察する観点から一二八六年の慣習法成文化までを範囲とするものである。

資料については『Saisimentum Comitatus Tholosani』をトゥールーズの王領併合の際の資料として、『トゥールーズ慣習法』を慣習法の資料として読解する。なお、『Saisimentum Comitatus Tholosani』の条文和約に関しては図師宣忠氏の「中世南フランスにおける誓約の場—トゥールーズ伯領のフランス王領への編入から—」『都

市文化史研究』四号 pp.73-86を参照した。

二、事件史としてのアルビジョワ十字軍

紙幅の関係上アルビジョワ十字軍について説明する事は割愛する。この章において筆者が念頭に置いたのは、次の二点である。すなわち、日本人にとってなじみの薄い事件であるアルビジョワ十字軍の概説と事実関係の整理、および後段の論考において展開する事項の論拠である。すなわち、当初、「真の十字軍」として教会主導で展開されたアルビジョワ十字軍が、北仏騎士、ひいてはフランス王権の南仏への浸透、進出をねらうものへと転化するのである。この狙いの下に、一二〇八年から一二二九年の和平協定に至るまで、あるいは一二四三年の南仏騒乱にいたるまで、対領主戦としてアルビジョワ十字軍が展開されたのだが、一二七一年の「トゥールーズの差し押さえ」一二八六年の「トゥールーズ自治の特許状」の資料を見ると王権の支配と市民の権利についてせめぎあいがあったことが伺われ、

王の支配権の適用をめぐって、王と市民との間に政治的な抗争が展開されたのである。その論拠となり得るように事件史としてアルビジョワ十字軍を捉えたのがこの章である。

三、アルビジョワ十字軍とその帰結についての研究視座

この章では、前章の史実に対していかなる検討がなされてきたか分析し、批判検討した。先行研究を分析すると大きく四つに分類されたと考えられる。

①…「先進的」北フランスの「後進的」南フランスに対する支配であり、アルビジョワ十字軍は南フランスの衰退を余儀なくさせるものであった。

②…「不完全封建制」の中で封主としてのトゥールーズ伯と諸副伯、市民との対立構造が王権の介入に帰結するのであるが、アルビジョワ十字軍によって名実共にフランス王権に服する事となったのである。従ってアルビジョワ十字軍に重きを置き封建王

政的観点から当該事件を考察するもの。

③…アルビジョワ十字軍による軍事的衝撃はあるものの、南フランスの支配はアルビジョワ十字軍の後に徐々に浸透していったのである。従ってアルビジョワ十字軍よりはその後の政治的施策に重きを置き、中世政治、都市政治、行政の面から考察しようとするもの。

④…アルビジョワ十字軍の結果がそのままフランス王権と南フランスの権力関係を規定するものではなく、中世における北フランスと南フランスの関係という対称的關係において考えられていくべきである。従って、アルビジョワ十字軍に意義を見出すよりは、別個の権力同士の関係から両者の権利権力関係が構築されたと考えるもの。

紙幅の関係上①から④について論の概略を記すこととする。

①の視座はベルペロンに代表されるが、党派的な視座であり、南フランスあるいは北フランスの片方の立場に立ち事実関係を見誤らせる危険を孕んだ視座といえる。

②の視座はウォルフ、渡邊昌美らによってなされ、二章で概観した、アルビジョワ十字軍の対領主戦としての性格を重視し、南フランスの不完全封建制ゆえに北仏の進出を招き、敗北した事で、北仏の強力な封建制度の下に南仏が消化吸収されたとかがえているものである。

この視座においては、アルビジョワ十字軍の契機については、合理的に説明されている。しかしながら、前出の一二七一年一二八六年の両資料を考えると国王と市民との関係が過小評価され、また、アルビジョワ十字軍の影響と結果について効果的に説明されていないといえるのである。

③の視座はムンディー、ドッサ、フィリッシュュらに代表される。彼らは、アルビジョワ十字軍の勝敗の影響をある程度は認めるものの、南仏への王権の伸張を王弟アルフォンス・ド・ポワティエの施策によるところが大きいと考えている。しかしながら、王領併合や慣習法の成文化といった時期について言及しているわけではないので、不十

分であるといえる。

④の視座はル・ゴフ、図師宣忠に見られる。ル・ゴフは①から③までの研究の正當なかつ総合的な継承者であると思われる。ル・ゴフの批判の対象はベルペロンや文藝の世界におけるミストラルに代表される、南仏に重きを置く研究者であり、ル・ゴフの論じる「対等な」関係として北と南を研究する態度は、地域として北と南には格差が存在しないという意味においてのみなのである。

一方で、図師は、ル・ゴフの言を引きながら、意図するところは、ル・ゴフとは一線を画する。すなわち、「トゥールーズの差し押さえ」と「トゥールーズ慣習法」の両資料に着目し、北と南のフランスの間での政治的抗争を経て王権の支配が南仏に確立していったと考えていると同時に、王と市民の関係を北と南の「支配権の確立していない」等価な関係として捉えているのである。図師論文の意義は王権と領主という従来の枠組みを超えた点にあるのであって、

王と市民との関係にまで視野を広げた点にある。しかしながら、王権の王国内での絶対的優位性という法理的側面、および、塗油された存在であるフランス国王の神聖性に対する視野に欠ける嫌いがある。すなわち、封建王政にたいする配慮に欠けるのである。したがって、図師の研究を封建王政の文脈によって読み直す必要があるのである。

四、『トゥールーズの差し押さえ』読解

四章、および五章は検証と図師の研究を読み替えた章である。この二つの章では資料と図師論文を、論点を定めた上で詳細に検証した。紙幅の関係で逐次的な検証が不可能である以上、ここでは、問題とした論点と参照先を示すに留める事とする。資料はイヴ・ドッサ編『Saisimentum Comitatus Tholosani』である。図師氏の論については「中世南フランスにおける誓約の場合―トゥールーズ伯領のフランス王領への編入から―」『都市文化史研究』四号 pp.73-86

を参照されたい。

具体的には、差し押さえの記録集成である資料の王の命令書と九月一六、二〇日の集会、及び、一二月二〇日から二四日の集会についての記述をもとに考察した。二〇日の集会において、トゥールーズ市民が自ら王の支配を、慣習の承認という留保つきで「熱望し尊重」したこと、一六日の王側の様式による集会が二〇日に市民側の様式で結びなおされ、最終的には折衷的な方法で確認された事、この二点を指摘した。このことを踏まえて、王が王の命令書のおりに、単にトゥールーズの遅滞なき併合を意図していたのに対し、市民が王領への併合を熱望と尊重をもって期待すると同時に、自らの慣習と特権の継承を意図していたことを論証した。図師氏はこの資料を通して、北と南が統治者と被治者の関係の一つの様相を結びなおしたと捕らえ、前記の意図のずれを政治的局面に対する両者の認識のずれとしている。

図師氏は一三世紀における統治者と被治

者の関係構築という形而下の事象のみについて論じるのに終始し、最高封主としての国王と身分制という中世的世界観、政治感に視野がいたっていないのである。資料から見えてくることは法理的、霊的な次元において支配権を持ち優位性を持った王権が現実とその支配を適用する施策・政策であり、トゥールーズ側にとっては既得権の確保という意図とのせめぎ合いの関係、両者の攻防である事なのである。図師氏の問題点は封建王政の構造を視野に欠くことで、王権と南フランスの「意図のずれ」を「認識のずれ」と認識してしまっている事に収斂している。両者の攻防である以上、資料にみえる「ずれ」は「認識のずれ」ではなく「意図のずれ」であると考えるべきなのである。では、留保された慣習の承認はどのように解決されるのであろうか。

五、『トゥールーズ慣習法』読解

この章でも図師論文について逐次読み直しを行った。前章と同様に論点を挙げるに

とどめる。資料はアンリ・ジル編の『Les coutumes de Toulouse (1286) et leur premier commentaire (1296)』であり、和約を埒取によった。図師論文は中世フランス王権による南仏支配と慣習法―『トゥールーズ慣習法』の承認をめぐる―『洛北史学』五号、pp.52-76があたる。

この章で扱う『トゥールーズ慣習法』について、筆者は前章を受け、王権と市民との間における慣習と特権についての折衝であると捉えている。一方で図師氏は王権と南フランス諸都市を結びつける関係構築の回路の一つであると捉えている。この資料について、図師論文の読み直しを、慣習法成文化の経緯を記す前置文と覚書、王の検閲によって削除された条項の検討によって行った。図師は慣習法の成文化にあたって、その発議が市民側によってなされていることから、市民が自らの特権を体系的な慣習として王権に認めさせる戦略をとったと考えている。しかしながら、王権による条項の削除についてトゥールーズは一切反駁を

していないところから、北と南のフランスは図師氏の想定する完全な他者ではなく、あくまで封建王政の身分格差のなかで関係していたことが理解できる。従ってトゥールーズ市民は現実的路線において政治的手法をもって格差の枠内での特権獲得を画策したのである。よって図師氏の特権の請求を通して互いの関係を決定させたという論は適当ではないのである。

削除条項を概観すると、王の権威、文書、法的手続き等における王権の優位性、経済、度量衡における市民の恣意性の否定を見る

ことができる。この具体的事象をとおして、フランス王権は自身の霊的な優位性、法理的な支配権を現実適用に適用していったのである。図師氏は王権側が慣習に権威を与える事で法を通じた支配を意図しているのに対し、トゥールーズ市民が慣習法の特権と認識しているというズレを指摘している。図師氏は慣習法を通して、都市が特権を主張するばかりでなく、「法」として都市を縛る論理となったと考えているのである。

しかしこの点について、一二七一年の伯領差し押さえの時点でトゥールーズは現実的にもフランス王権の支配下に入っていたのである。よって、あくまで都市は王権の下位に位置づけられる存在であり、王権が法理的な支配権を有する都市に対して、その支配を敷衍、実行するという政策的な問題に発展したのであった。それゆえに、慣習法の成文化によって現実的に南フランスが王権の下に吸収されたのであるといえる。従って、図師氏の指摘するような関係構築論は成り立ち得ないのである。

六、終わりに

従来、アルビジョワ十字軍とフランス王権の伸張は、ウォルフや渡邊といった研究者に代表されるように、その起因の解明と王対領主という側面に注目される嫌いがあった。図師はその中に王と市民との関係を見出したのである。しかし、図師の論は現実的な構造には効果的な説明がなされていたが、中世の霊的構造に対する配慮が至って

いなかったのである。従って、図師の論を封建王政の文脈において、霊的、法理的な支配の現世的適用の課程として読み直す必要があったのである。その中で見出されたのが、王権とトゥールーズ市民との間で取り持たれた、身分に根差した折衝であり、せめぎ合いであったのだ。その身分間の対話は、伯領差し押さえにおいて意図のずれとして表面化し、慣習法の成文化に至って、双務的な関係として結実したのである。

〈考古学専修〉

黒海沿岸地域における

竿頭飾の研究

―構造に基づく分類の試み―

川畑 隼人

ユーラシア大陸の中央部には広大な草原地帯が広がっており、この地は古来より東西交渉において重要な役割を果たしてきた。実際にモノや人の移動に関わっていたのは、